

PDF issue: 2025-07-11

run issue: 2025-07-1 研究者生活をふりかえって(岩崎信彦教授 退職記念 号)

岩崎, 信彦

(Citation)

社会学雑誌, 24:1-8

(Issue Date)

2007-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81011063

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011063



研究者生活をふりかえって

岩崎信彦

一 研究者生活のスタート

私は、 対の無期限ストに始まる「大学紛争」は、京都大学に一九六九年一月に「学生部封鎖」という形で飛び火してきた。 事務局長の役についていた。否応無く「紛争」に巻き込まれていったのである。 私の研究者生活はのっけから「大学紛争」に迎えられた。東京大学医学部における一九六八年一月の登録医制度反 一九六八年二月に修士論文を書き終え、文学研究科博士課程一回生に在籍しており、全学の大学院生協議会の

りに整理してまとめたのが「マルクスにおけるゲゼルシャフトとゲマシンシャフト序説」(七二年)であった。 はそれに規定されながらそれを形成、変容させる社会的(social)過程を意味している。そのあたりのことを自分な 的(societal)な骨格構造、すなわちマルクス的には「土台-上部構造」と言われるものであり、ゾチアールなもの しようとされていた。ゲゼルシャフトリヒな社会関係は、人間の主観から自立した生産関係に規定された、全体社会 アーリヌィの違いに注目しながら、マルクスにおける固有にゾチアールな領域を「マルクス主義社会学」として開拓 ゲゼルシャフトリヒ(gesellschaftlich)とゾチアール(sozial)、ロシア語におけるオプシチェストベンヌィとソツィ 古代的、ゲルマン的の三つの共同体類型を歴史的に考察したが、それを精練して活字にすることはできなかった。 マルクス派として研究者生活を始めていた私は田中清助氏から大きな影響を受けていた。氏は、ドイツ語における 修士論文で、マルクスの「資本制に先行する諸形態」と大塚久雄の「共同体の基礎理論」を比較しアジア的、古典

い環境であった。理論だけでなく現実分析もしなければと思う余裕が出てきて、地元の和歌山県有田市のみかん農村

一九七二年に高野山大学に職を得て、大学教員としての生活をスタートした。「紛争」の疲れを癒やしてくれる良

りを行い、 から過剰生産となり、産地はその対応に迫られていた。私が調査に入ったのはそんな時期であった。 に「選択的拡大」が叫ばれ、 |を始めた。一九六〇年の農業基本法以降、 経営規模別に類型化しながら、共同潅水施設や共同選果への経営対応の違いを明らかにし、 みかんは水田を転作してまで作られるようになっていた。当然のように六○年代 高度経済成長下の都市労働者に果物、酪乳を大量安価に供給するため 各農家の 今後の経営展 聞

開の課題を考察した。「『みかん危機』のもとでの村落生活の変化と主体的再編成」(七八年)がその研究成果である。

二 地域と労働の調査研究

区の木賃住宅密集街のまちのなりたちの調査を続けた。「木賃住宅の町に住みあう人々の生活史」(八九年)がその成 とればよいかを探る調査であった(「大都市周辺地域における地域生活と住民組織」八○、八一年)。その後も萱島地 労の要請を受けた遠藤晃氏をリーダーとする寝屋川調査にまず参加した。高度経済成長時代に一気に人口増大した、 とあって、伝統ある二つの町内会が力を合わせて抗議、交渉しようということになり、子ども神輿を作ってお祭りを を実現したのである。また、六地蔵、木幡という古い地域では、隣接の京都市域に高層の公的住宅団地が建設される 大阪都市圏のインナーリングにある衛星都市がどのように都市問題をかかえていったか、これからどのような対策を 人から資金を徴収して市水道の支管を敷設しようということになり、 ない。市は折からの財政難であった。各戸は井戸を掘って対処していたが不便であったので、これから転入してくる そこで町内会・自治会の創意的な活動に触れることができた。新しく開発された住宅地域には市水道が敷設されてい 緒に行ない、町内会の合併にこぎつけたということであった。日本の住民自治の原点を見る思いであった。 七九年に立命館大学に転勤した。所属した産業社会学部には専門分野の近い多くの研究者がおられた。寝屋川 都市も膨 一張による問題を抱えた時期であり、京都自治問題研究所のチームの一員とし 井戸掘り費用より安上がりの資金を徴収 査に入った。 市

地として蚕食され始めており、 また、深井純 一氏に誘われて高原野菜生産が拡大している長野県川上村に出かけた。そこでは入会林野が私的に 入会林野の歴史と現状の考察を行なった。後日談になるが、 報告書をまとめた八三年

ば評価がいいんだけどね(それはできない…)」と言っていた。経営側と労働者のしのぎを削る状況の一端を知るこ から十余年立ったころ、川上村役場から電話があり「入会地の問題がたいへんになってきた。ついては先生の報告書 とができた。職場の異なる労働者のインタビュー結果を分析しながら職場での労働状況をバーチャルに構成したのが し問題があるのでやめた方が良いと提案すればまた千円もらえる。たばこ銭稼ぎにはなるね。人を減らす提案をすれ かと思った。そこでのエピソードであるが、労働者は「改善提案をすれば千円もらえる。しばらくしてあの提案は少 しく、真面目な人が多く、高密度労働と交替勤務であるせいか、余り血の気がなく、慢性的に疲れているのではない てくれないので、社宅や団地に従業員を訪ね、職場の様子を細かに聞いていった。地方出身者が多いためか、 かんばん(just in time)方式のもとでの労働者の労働生活の分析にたずさわった。もちろん、企業は調査に協力はし 後でもあり、私は川上村を再訪することができなかったが、入会地はどうなっているのか気にはなっている。 をコピーして勉強会に使って良いか」ということであった。もちろんいいですよ、と答えた。阪神大震災が起きた直 さらに、辻勝次氏らを中心とするトヨタ調査チームの一員として、トヨタの地域戦略と地域状況、改善提案活動

三 ジンメルとマルクスの理論研究へ

「自動車産業労働者における労働生活と疎外」(八四年)である。

取り組んだ。私はかねてより生産関係に基づく「土台-上部構造」というゲゼルの論理をそのまま前提にしてゾチアー だからである。それゆえ、『資本論』という生産関係の原理論を読みほぐし、社会過程論へつなげてゆく道を探って ルな「過程」論をさまざまに膨らませてもマルクス主義の社会学はできないと感じていた。木に竹を接ぐようなもの (『町内会の研究』(八九年)など)、ジンメルの『貨幣の哲学』の研究を始め、マルクス理論の「乗り越え」にも 八三年に当神戸大学に転勤してきた。理論社会学講座に着任したこともあって、これまでの地域研究を集約しなが

貨幣が商品でなく象徴でよいことを確定したことである(「貨幣と価値― そのなかで私にとって一番大きなことは、価値形態の第五形態 (貨幣=商品 ジンメルとマルクス」八八年)。マルクスは、 a 商品b、

貨幣という「物象」を「心的相互作用」においてとらえていくという、相互に逆のベクトルを持っており、 償と価値」「絶対的手段=自己目的」「象徴」「世俗の神」などの魅力的なコンセプトによって貨幣の本質的な姿を浮 とを、マルクス自身の価値形態論の論理を使って解明したのである。キーコンセプトである貨幣が経済的実在にとど 幣は実質的な商品 むことによって貨幣という不思議な現象が良く見えてきたのである。「堕落する世俗の神=貨幣」(○一年)はこれら き彫りにしている。マルクスが人間の営みを商品や貨幣という「物象」において語っていくのに対して、ジンメルは まらず社会的表象でもあるということは、 あらゆる商品は貨幣と交換されるという第四形態 ジンメルの『貨幣の哲学』は、貨幣を人類の歴史的事象と心の相互作用のメカニズムから解き明かし、「距離」「代 を表現する第五形態が必要であり、 (=金) であるという論理で終わっている。しかし、貨幣はあらゆるものと交換できるという貨幣 マルクスの資本論を読み替えていくことができる要石になるはずである。 しかもその貨幣は商品ではなく象徴(「社会的形態価値」)でよいこ (商品 a、商品b、商品c、…=貨幣)までしか言っておらず、貨

のために」 九四年)。 換における第一巻の「等価交換」と第三巻の「費用価格+平均利潤率」(不等価交換) して、公害、資源収奪という生態系問題、 |平均利潤率の傾向的低落」によって資本主義は行き詰まりを迎えるという立論が成り立たなくなる(「新しい資本論 そのほか、「価値」は労働だけが生むのではない(搾取されるのは労働だけではない)。 不変資本と言われている物)も価値を生むということである。そうすれば、剰余価値率=利潤率となり、 技術の歪曲の問題も資本論としてとらえられてくる。また、マルクスの のずれの問題も消滅する。そ 原料、 土地、

をのちに簡潔にまとめたものである。

況をマルクス的にみると次のようになるだろう。 また、トヨタの労働者がカイゼン(改善提案活動) に取り組む姿に触れたが、それにかかわって現代の労働者の状

合も強かった。しかし、技術の進展、生産の社会化によって資本による生産過程の「実質的な包摂」が進み、労働者 us model(「俺たち(ブルーカラー) – やつら(ホワイトカラー)」)である。 個々の労働者としてではなく、 労働過程を形式的にしか包摂できず、実質は労働者に委ねていた。これがかつてのイギリスのthem-企画、管理、 技術も含めた「全体労働者」(マルクス)として存在している。 労働者は労働現場を支配しており、組

従事する。矛盾する二側面を「統一」する手法の結晶がトヨタ式カイゼンであったが、そこに人間としての内的葛藤 そして、賃金は、資本機能への貢献に対する報酬分配として現れるようになる。すなわち、賃金労働者は、そもそも ラスが形成される が生じる(人格的搾取)。そして、「全体労働者」の取替え可能な部品的労働には、派遣労働、請負労働、パートタイ 配が行なわれる(分配的搾取)。また、資本機能を「自主的」に遂行しながら、賃金労働者として長時間濃密労働に み込まれた労働者は、賃金分配において多様な方法(年功序列、成果主義、経営心理学など)が適用され、 て売らざるを得ない。ここに、基本的な搾取と意思決定からの疎隔がある(基本的搾取)。次に、「全体労働者」に組 生産手段がないので労働は売れない の機能としての生産=労働過程であり、「全体労働者」(生産労働システム)が剰余価値を生む、ということになる。 えるのはアンダークラスだけになっていっている。 マーをあてる。それ以外の3K労働には外国人労働者をあて、失業者、ホームレスも増えていく。ここにアンダーク (社会排除的搾取)。このように、「階級」矛盾は資本機能を担う労働者の人格のなかへ内攻し、見 (農民、自営業者は生産物の形で売れる)。いわば「未労働」を労働力商品とし

四 阪神・淡路大震災の調査研究へ

したのである(「避難所運営のしくみと問題点」九五年)。 もに灘区の全避難所調査を行った。どのような「臨時社会」が形成されているか、どんな問題を抱えているかを分析 七日、兵庫県南部地震が発生した。教室の学生の安否確認や年度末の試験措置を済ませて、三月に多くの院生とと マルクスの「乗り越え」の研究はいよいよ第二ステージに差しかかろうとしていたまさにその時、一九九五年一月

が集まり名簿ができていった。院生諸君は各町内の会に分担して参加し、住民と市担当者のやり取りを書きとめ、 をかぶせようとしていた。まず、院生と一緒に地元の六甲道北部の区画整理事業予定地域に入った。数名の住民が集 その頃、兵庫県や神戸市は住民が離散している激甚被災地域に対して市街地再開発や区画整理事業の都 「考える会」に参加した。そのなかで、四散している住民をどのように集めることができるかの議 「神戸市に物申す会」というのを町内ごとに開いてはどうかと提案した。それが一度二度と開かれるうちに住民 0

とめて冊子にして配布した。こうして六甲道北部の復興協議会が結成される端緒が開かれたのである。

は電車やバスを乗り継いで訪ねた。それから六年後の二○○一年二月、神戸市で最初の事業完了となったが、 整理事業は今回で終わりに」(九九年)である。 第三者機関が作られず軋轢をいよいよ激化させたこと、である。この経験をまとめたものが「復興まち壊し土地区画 反発させあるいは意気阻喪させたこと、三つは、仕組みとしてコンサルタント、弁護士、研究者といった人からなる 轢を生じたこと、二つは、神戸市がその履歴から「都市経営主義」であり住民は「統治対象」であったので、住民を の間、「復興まちづくり協議会」とともに活動した。市と住民の対立、住民同士の対立はほんとうに厳しいものであっ また、NHKのドキュメントで長田区の鷹取東が放映され、家族を亡くしながらも助けあっている姿に感動 その原因は、 一つは、土地区画整理事業という法定事業が災害復興を目的に作られたものではないので多くの軋

災研究 5 大震災を語り継ぐ』が七年間にわたって刊行された。 3 神戸の復興を求めて』、九九年一二月に『阪神大震災研究4 を呼びかけ、四月に会が立ち上がった。そして、九五年一一月の神戸大学震災研究会編『阪神大震災研究1 大震災 一〇〇日の軌跡』を皮切りに、九七年二月に『阪神大震災研究2 苦闘の被災生活』、九七年五月に『阪神大震災研究 私は、神戸大学のさまざまな専門の研究者が復興支援と調査に入っていることを知り、神戸大学震災研究会の結成 大震災五年の歳月』、二〇〇二年一月に『阪神大震

ことはほとんどなかった。しかし、この『震災の社会学』三巻本ができてみると、社会学者でないととらえられない 生活の社会学』、『阪神・淡路大震災の社会学第3巻 復興・防災まちづくりの社会学』を刊行した。当初、私が被災 会学ならではの視角からの考察であり、次の震災に対する教訓を導くために不可欠のものになると思う。 **震災と被災地の実相が浮かび上がっていた。被災者やボランティアの目線で錯綜する事態が把握されているのだ。社** 地に入って感じたのは、社会学の無力性であった。震災復興の現場において具体的に何かをアドバイスできるという て九九年二月に『阪神・淡路大震災の社会学第1巻 被災と救援の社会学』、『阪神・淡路大震災の社会学第2巻 避難 また、多くの社会学者が全国から調査に入っていたので、その成果を一つにまとめておこうということで、協力し

である。ここでいくつか補足してみると、一つは、都市や地域がその「履歴」によって異なる対応を示すということ 震災の全体を私自身が総括的に考察したのが「市民社会とリスク認識―阪神大震災の意味するもの」(二〇〇二年)

数の区画整理事業を実施した経験から、都市計画決定の日程を繰り下げ、住宅施策と結合して住民の合意を形成 中にどれくらい「まちづくり」や「相互扶助」の経験が蓄積されているかが、災害対応において大きな違いとなって **「顧客」、悪く言えば「統治対象」であり、一部を除いて地域の自治力はあまり育っていなかった。尼崎市は戦後に多** 芦屋市西部地区は住民が、 人間でもそうであるが、都市でもそうなのである。「株式会社」といわれた神戸市では、 専門研究者の協力を得て、みずからまちのデザインを作っていった。市や地域の 住民は 良く言 つてて

来の「高齢社会」 多く残っていて集中的に被害を受けたが、その後の「仮設住宅」「災害復興住宅」への「収容」的な施策によ 二つは、大災害によって社会過程の進度が速められたということである。 いものがあり、 が集約的にそこに表現された。また、「ボランティア元年」に端を発する市民活動の展開はめざま 地域に根ざす相互支援型の新しい社会モデルを創造していった。被災地は市民活動の一つの先進地 高齢者がインナーシティー 0 いって将 住宅に

になっている。

表れるのである

ようとする決意が足りないように思う。 ワールドシティである。神戸市は大都市災害の経験と減災の都市づくりを世界に発信するワールドシティとして生き 港湾機能の低下を空港機能によって補完し、現代の大都市で初めて震災にあった経験を活かして医療産業都 空港の工場用地が売れ 四 三つは、 をめざすことがもっと重要であろうと思う。広島市はグローバルシティではないが、 1ーバルシティをめざそうという戦略は理解できないではないが、ワールドシティとしての世界都市 [つは、それにかかわって「災害文化」をどのように形成していくかである。 神戸という大都市が引き続き「都市経営」上の問題を抱えていることである。 ないことや空港の収益が想定以下であることから神戸市は深刻な財政的問 災害文化の原点には 世界に ポートアイランド第 題 不戦と非核を訴える 直 「自然災害と共 面 (マンフォー 市 7

それをどのように復活させるのか、 に生きる」という思想と方法があった。現代都市はハードの防災に重点をおくことによってそれを忘れてしまった。 リスクと共に生きる」ということと合わせて考えていかなければならないだろう。 また「リスク」という形で自然・社会災害のポテンシャリティが高まってい

五 定年を迎えて

込まれ、さまざまな問題が噴出あるいは内攻している。しかし、大学と学問が社会への貢献をもっと強めるべきだと れを達成していくことが必要であろうと思う。 いうことは抗いようがないことであり、それ自体は積極的なことである。ただ競争主義、成果主義でない方法論でそ から二年間)という役職を担うことになった。大学も大きな社会の流れに抗すことができず「構造改革」の渦に巻き 震災の関係は一段落していったが、学部の大学院重点化改組の責任者、国立大学法人化の際の学部長

定めたいと考えている。 りて何とか私なりの研究者生活を続けてこられたのではないかと思っている。定年後は、マルクス派でもありジンメ る会員と共同で、『地域社会学講座1 地域社会学の視座と方法』『地域社会学講座2 グローバリゼーション/ポス れまでの学会の成果をまとめようという気運のなか、古城利明氏、似田貝香門氏、矢澤澄子氏をはじめ多くの敬愛す ル派でもある、という私の研究個性を生かして、そこから理論的にあるいは実践的に何が生まれるのか、じっくり見 トモダンと地域社会』『地域社会学講座3 地域政策とガバナンス』を刊行することができたのは喜びであった。 学部長とほぼ同じ時期に地域社会学会の会長を務めることになった。ちょうど学会創立三○周年を迎えており、こ 研究者生活を振り返って、至らぬ点、力及ばなかった点が多々あることに気づく。しかし、周囲の方々の助けを借

謝しながら、この私記を閉じたいと思う。 さいごに、職場の皆さん、研究者仲間、 勉学の場を共にした学生・院生諸君、 被災地で知り合った多くの方々に感

大記

が一部重なっていることをお断りします。 本稿は、二○○六年一○月一四日、地域社会学会例会における「わたしにとっての地域社会学」という報告と内容